中江藤樹の思想形成と漢詩

山下龍二

一　資料について

藤樹の漢詩文集には『藤樹先生遺稿』（二巻、一冊、寛政七年（一七九五）刊）があり、『日本倫理彙編』一（陽明学派の部上）に収録されている。『彙編』の解説によれば、この他に写本として『藤樹先生家集』一巻、『藤樹餘稿』一巻、『藤樹文録』一巻、『藤樹別集』一巻、『江西文集』一巻などがあるが、皆大同小異であるという。『国書総目録』によれば、この他に『藤樹先生遺文』一冊（安原貞平編　享保十五年（一七三〇））、『藤樹遺文別集』一冊、『藤樹先生文集』一冊、などの名がみえる。また『藤樹先生草稿集』（『藤樹先生全集』一、解題六頁参照）もある。これらの漢詩文の全体はほぼ岡田季誠編『藤樹先生全書』の巻二、巻三、巻四、及び篠原元博編『藤樹先生全集』の巻一、巻二に文集として収録され、両全集にもとづいて成立した『藤樹先生全集』（五冊、昭和十五年　岩波書店）一の巻二、巻三、巻四に整理編集されているわけである。

本稿は『日本倫理彙編』所収の『藤樹先生遺稿』巻之一（詩類）、及び『藤樹先生全集』一の巻之二（文集二　詩）に収められた藤樹の漢詩を資料として、藤樹の思想形成を追究していく。上の『遺稿』には四十首の漢詩があり、『全集』には六十六首の漢詩がある。『全集』の漢詩に假に一連番号を附してみるとそのうち『遺稿』に収められていたのは、①②③㊸⑤⑥⑦⑧⑨㊺⑪⑬⑭⑮⑯⑩⑫⑰⑲⑳㉑㉓㉒㉖㉘㉗㉙㉚㉛㉝㊹㉟㊱㊲㊳㊵㊶㊷㊸（『遺稿』の収録順序による）という四十首となる。『遺稿』は藤樹25歳から41歳までの漢詩をほぼ年代順に配列している（寛永十四年丁丑＝先生三十歳と同十五年戊寅＝先生三十一歳の漢詩（⑩～⑲）には多少順序に出入があるのみ）。『全集』一の巻之二の43首目までのうち、④⑱㉔㉕㉜㊴（六首）が『遺稿』にはなく、また『遺稿』には『全集』一の巻之二の㊸㊹㊺（三首）が入っている。したがって『全集』の①から㊸までのうち六首を缺き、三首が入っているのが『遺稿』なのである。『全集』の㊹「明徳首尾吟」（九八頁）の注に「此以下之詩年次不詳」とあるように㊹～㊻は年次が不明というのであるが㊸㊹㊺には年次の記載があり、したがって『遺稿』ではそれぞれの年次の位置に入っている。そこで本稿は年次の明らかな詩のみを取り上げ、その文字の多少の異同については

『遺稿』『全集』及び全集の頭注を参考として正文を定め、また読み方も正しつつ論を進めていく。なお詩の題名は検索に便利であるのですべて『全集』に従っておいた。

二　致仕前の心境

藤樹は寛永十一年甲戌（一六三四）、27歳の冬十月に致仕して江州小川村に帰った（年譜）。脱藩という危険を冒してまで故郷に帰った理由あるいはその心境をまず探ってみよう。

25歳（壬申之冬）の①「寄友」の詩にいう。

① 産業隨レ時必勿レ擇　伊耕二莘野一呂漁翁
君看不レ有二殷周遇一　依レ舊釣磯畎畝中

この詩は伊尹や太公望呂尚がもし殷の湯王・周の文王の知遇を得ることがなかったなら、農業、漁業をなりはひとしてその一生を過したであろうという意であるが、藤樹は27歳の脱藩より以前に早くから帰農、帰省の気持を強く抱いていた。伊・呂の故事に託して藤樹は、産業（職業）の違いはむしろ偶然的に生ずるのであって、士農工商といった四民の別はたんに職業的な違いにすぎず、人間としてそこには何の上下の差もないことを言いたいようである。つまり四民平等的な思想を早期から抱いていたのであって、たとえば王陽明が「四民、業を異にすれども道を同じくす」（『王文成公全書』巻25 節庵方公墓表）といい、士を尚び農を卑しむ風潮を批判したのと似た思想といえる。この頃にはまだ陽明学には接していないが、聖王にめぐりあわなければ隠れるという儒教思想とつながっている。「天下道あれば則ち見れ、道なければ則ち隠る」（泰伯　一九七）といった論語の言にもつながるであろう。ただし、藩主が無道であるといった意識からではなく、士として仕えることが自分にとってあまり適していないという自覚がこの詩となったように想像される。

26歳②「癸酉之歳旦」の前書には「癸酉之元旦、参神事畢、而独坐有二郷思一」とある。元旦の行事として氏神に詣ることは、民俗的な風習であって、後に藤樹が太乙神（皇上帝）を宇宙の中心的統一神として祀るに至った（33歳）のとは多少質が異なるであろうが、吾が朝開闢の元祖として伊勢神宮に参詣した（34歳）こととは無縁ではあるまい。藤樹は日常的慣習的な信仰心を生来持っていたわけである。これがやがて自覚的に反省され思想的に深められて皇上帝信仰にまで至るのである。ついで「郷思」の語がみえるが、文は「屈レ指羇旅既十三有八年于此一矣」と続く。9歳のとき小川村を離れて米子に遷ってから26歳まで足掛け十八年であり、この間郷里を思いつづけていた。28歳の④「乙亥之歳旦」の前書にも「遊宦在二於他邦一有レ年二于此一矣、歸逢二郷党乙亥之春一、而和楽且耽、以足レ知二羇旅十有九年之非一」とあって、米子、大洲、風早という他郷に過したのは藤樹にとっては悔まれる生活であった。

④ 郷黨元旦會二九族一　和氣油然相親睦
昔日雖レ知非二眞知一　舟可レ行レ水車則陸

とあって、郷里での生活の満足感を詠んで過去の日々の苦痛を浮び上

がらせている。昔日の「知」はおそらく朱子学的な知を求めつつ武士として務めたことを指し、それは、現在士をすてて得られた「真知」ではない。「格套」的な知を否定して真の「知」を求める藤樹の心は後に陽明学の「良知」を発見する素地となっている。②の詩にもどると、その前書に、皐魚の事を読み、「樹欲レ靜而風不レ止、子欲レ養而親不レ待」の句に至って、「之を三復して昨の非を悔悟す」という。26歳の年譜に「老母ヲ思フノ詩アリ」とあり、この詩は藤樹の親孝行の志を示すものとして特に有名である。

② 羈旅逢レ春遠 耐レ哀 緡蠻黄鳥 止二斯梅一
樹欲レ靜 兮風不レ止 來者可レ追 歸去來

老母への孝養のために武士をすてたということが一つの定論となったのはこの詩句による。しかし老母への孝養のみを脱藩の動機とみることは必ずしも妥当ではないであろう。何といっても武士としての生活そのものが彼にとって不快であったのである。止まるべき場所は小川村にしかないという心境は26歳に於いてすでに頂点にまで達していた。「故不レ泥二詩法一、而只用二二十八字一而已」と前書にいうが、詩法にとらわれないで心境をそのまま吐露したというのは、あらゆる束縛から逃れたいという強い願望を示している。それは朱子学的格套の否定と通じているし、「帰りなんいざ」という最後の句はその痛切な心をよくあらわしている。なお年譜27歳の条に家老佃氏への手紙があり、「母、老テ故郷ニアリ。此地ニ倡ヒ來ラント欲スレドモ肯ハズ。願ハ能君ニ奏シテ、仕ヲ致スコトヲユルサレンコトヲ」とあって、ここでも老母への孝養を致仕の理由としている。これはいわば公式の文書であるから、藤樹の致仕の心境の全体をあからさまに述べているわけではない。おそらく藩主に致仕を認めてもらうための理由としては孝養がもっとも説得的であるからであろう。孝養のために致仕するというのは何人も反対しがたい事由だからである。なお藤樹の「孝」思想はたんに父母に対する孝養といったせまい意味にとどまるのではなく、後に明らかになるように、皇上帝を信仰し、この宇宙的世界の中で人間として正しく生きていくことが「孝」であった。つまり孝は皇上帝への孝であり、孝徳は人間の一切の徳を包含する。この孝観念は倫理的であるよりも宗教的である。

29歳の⑨「送藤田嶋川両生」に

⑨ 心友相逢堪レ弄丸 波瀾雖レ起點無レ瀾
父慈子孝晝前易 須下向二韋編絶處一看上

とあるように丸は宇宙の根源たる「太極」を意味し、この孝観念は易の太極に身心を委ねきることを指している。31歳の⑫「戊寅之鶏旦讀二孝經一偶成」には

⑫ 心地收レ春當レ踐レ形 於レ人細柳眼先青
元爲レ老和氣爲レ子 充二塞兩間一惟孝經

とあって、元気（根源の気）と和気との関係が宇宙的な父子なのであって、孝経を人間的であるとともに宇宙的な孝を説く書物であるとする。このような孝観念を説くに至る藤樹は、たんに個人的な孝養という動機のみによって小川村に帰ろうとしたのではない。朱子学にも武

士の生活にも満足せず、真なるものへのやみがたい希求があって彼は新しい生活を望んだのである。要するに藤樹の「帰りなんいざ」の句は彼の全体的な生活感から生れてきたものであって、老母への孝養という一面的な理由のみによるのではない。

三　喘息の持病

致仕を願う心境にいたる身体的原因として重要と思われるのは、藤樹の持病としての喘息である。年譜によると、25歳の条に「春、暇ヲ乞テ、江州ニ帰省ス。其意、母ヲ倡テ豫陽ニ帰リ、定省ノ孝ヲ尽サンコトヲ欲ス。然レドモ、母老テ、古郷ヲ離レ遠途ニ趨クコトヲ欲セザルヲ以、獨リ豫州ニカヘル。帰路、船中ニシテ始テ哮喘ヲ患、キワメテ甚シ。」とあり、小川村に一時帰省して再び大洲に帰る途中ではげしい喘息となった。

このような故郷への思いがつのって①の詩が生まれた。異郷にあって喘息の持病に悩まされるとき、故郷に帰ればすべてが好転するであろうと期待するのは当然である。『藤樹先生全集』五の「藤樹先生補伝」のなかに、「一九、藤樹先生大洲辞任の事情について」（下井小太郎、一四二頁）があり、それには、大洲藩主月窓公のことが書いてある。「月窓公は英明豪膽の君主にして能く賢才を登用し、孜々として改革を断行せり。故に柔弱用ふるに足らざるものゝ如きものあれば、旨を含めて暇を遣はし、一旦旨に忤ふものあるときは直ちに切腹を申付けらるゝの有様なりき。先生かゝる君主の下にあって許可を待たずして去る、その決心の堅きを知るべし。而して先生直ちに小川村に帰らず、京都に滞留せるは固より追手の來るべきを豫期せるなり。然るに侯（新谷侯―新谷藩は、大洲藩の支藩であって、実際の政務は大洲藩主の裁量によったという。藤樹は新谷藩に分属されていた）之を不問に付せられたるは特別寛大の処置にして、深く先生の心事を察せるものといふべし」とある。月窓公のような藩主の下にあって藤樹は、喘息の持病も手伝い十分に藩士としての務めを果し得ないのではないかという危惧の念が生じてきたのであろう。「格套」を墨守したという生来の几張面な性格からみても、そのようなことで務めを完全に果し得ないことに対する自責の念が積み重なってきて武士を捨てたいと考えるに至ったのではあるまいか。実際には追手もかからなかったのであるから、藤樹の勤務ぶりは客観的には決して悪くはなかった。「（後になって）大洲の子弟相率ゐて近江に至り、先生に従学せるのみならず、侯また之を黙許せるによりて考ふれば、藩主と先生との間、敢て何等の問題もあらざりしや明瞭なりとす」（同上）ということであるとすれば、藤樹の危惧はその完全主義的な性格からくるものであったかもしれない。哮喘ははたして結核性であったか否かなどについては知る由もないが、柔弱用うるに足らざるものには暇をつかわすといった藩風の中で藤樹が悩んでいたことは想像できる。27歳のとき佃氏に捧げた暇乞いの文に「一つには何れも如二御存知一、二三年以前より病者に罷成候而、次第に人なみの御奉公相つとめがたき体、迷惑に奉レ存候。」とあって上述した心境をうかがうことができる。

さらに老母のことについては「一つには古郷の母、十年以来ひとり住を仕罷有候。私の外に母をはごくみ可レ申子も無二御座一、又はよすがに頼可レ存ほどの親類も無二御座一候故、四五年以前より漸々飢寒に及ぶ体に御座候間、此地へつれこし可レ申と存たてまつり、去々年御理申上、むかひに参候處に、もはやとし罷寄、又は病者に御座候而、里の内をも自由にありき申事不二罷成一体に御座候。……御暇申請、古郷へ罷歸、母存命之間は如何様のわざを成とも仕、養申し、母相果候はゞ罷歸、貴様頼存、めしかへされ被レ下候はゞ、御奉公仕度覚悟に御座候。此外、聊存子細も無二御座一候。」という。藩士としてのいわゆる宮仕えに不適なことを自覚した藤樹は、老母への孝養という最上の理由を表面に立てて脱藩を敢行したということになるであろう。

ところでこの老母は藤樹の歿後十七年を経て寛文五年（一六六五）八十八歳で歿している。藤樹二十七歳（一六三四）のとき、母は五十七才であった。藤樹は三十歳で結婚したが、「其女、容貌甚醜シ。先生ノ母、コレヲ愛ヘテ、出ント欲スルコトアマタ、ビ。然レドモ先生、固ク辞ス。容色醜シトイヘドモ、性質甚聡明ニシテ、心ヲ用ユルコト貞シ」と年譜に記載してあるように、嫁姑の問題に悩まされたであろう藤樹の姿を垣間見ることができる。妻久子は藤樹39歳のとき26歳で亡くなっている。そこには絵にするような美しい母子関係は必ずしも成立していないようであるし、帰郷後の藤樹の詩には、前述したようにいわば宇宙的に拡大された孝観念を説く詩はあっても、自分の母について個人的な心情を吐露した詩は一つも見当たらない。

年譜28歳の条に「先生、嘗曰、『予、豫州ヨリ歸テ后、少ノ間暇アレバ眠リ臥テ、ヨク寢ルコト一年余。此頃年、心常ニ人間世ニ放在シテ、精神ヲ播弄スルガ故ナリ。豫州ニ在シトキ、夜ル寢テ後、人ノ呼コト一聲ニシテ醒、或ハ跫音ヲ聞テモ覺ム。故ニ以爲ク、心明ニシテ、ホトンド「寢テ不レ尸」者ニ近、ト。今コレヲ思フニ、支撑矜持ニ拘攣スルガ故ナリ』」とある。豫州での武士としての束縛された生活は彼の精神を疲らせ不眠症にしていたことがわかる。これが喘息症状の心理的な原因であったかもしれない。ともかく喘息と不眠の相乗作用によってかなりの神経衰弱にまで陥っていたのである。小川村への思慕はこのような身体的症状によって促進され、やがて脱藩の行動にまで駆り立てたと思われる。「ヨク寢ルコト一年余」という療養が彼の病状を落ちつかせたのであろうが、その後も年譜32歳の条に「『論語』ノ解ヲ作ント欲ス。……病苦ニサヘラレテ果サズ」とあり、33歳の条に「夏、『太乙神経』ヲ撰ラバントシテ、稿半ニ及ブ。病ヲ以テ終ニ成レ書ニ及ズ」「是ニ於テ數條（翁問答下巻）ヲ改ム。疾ヲ以テ成ズ」、また34歳の条に「秋、『孝経啓蒙』ヲ著ント欲ス。疾ニ依テ又成ズ」とあるように、気を入れて著作を志すたびに持病に妨げられていた様子がわかる。こういった状態の中で『王竜溪語録』や『性理会通』を読んで、太乙神信仰を知り、また太虚・一貫の道を学びとり（33歳）、朱子学的格套を脱することの必要を自覚していく。朱子のように細かく詮索していく学問は彼の身体的状況にとっては死をもたらすにすぎない。皇上帝信仰や良知といった簡易であってしかも根源に

直入する如き思想こそ彼に生命を保障するものであり、そこに精神的解放感を得ることができたのである。

四　帰郷直後の心境

27歳（甲戌之冬）の③「舟中見二水月一有レ感」は脱藩直後の心境をよく伝えている。

③　念慮一毫差　應酬千里訛
　人心宜レ主レ靜　明月不レ沈レ波

主静の語は周濂溪「太極圖説」を思い起させるけれども、前述した喘息の持病を考え合わせると、そういった哲学的な面よりも、もっと身近かな願として静かで心の安まる生活を求めた心境があらわれているように思う。思いきった行動が好結果をもたらすにちがいないという期待感がそこにある。翌年28歳（乙亥の春）の㊸「謹賛文宣王之尊像」には

㊸　明同二日月一　德合二乾坤一　人中太極　宇内至尊
　　觀感所レ得　作二耳聞論一　莫レ道圖畫　不レ繪二神言一

とあって、孔子を賛仰すること神の如くである。後に皇上帝を信仰するに至るような精神的素地、すなわち何か偉大なるものを絶対化して神として信じたいという性向を知ることができる。36歳（癸未之秋）にも㊸と同題の詩があり、

㊹　太虚廖廓　夫子至仁　兩儀化育　六經經綸
　普天之下　率土之濱　有二血氣一者　莫レ不二尊信一

という。㊸と多少異なるのは「太極」の語が消えて「太虚」となっている点であって、理的な太極よりも気的全体世界としての太虚を大きくとらえ、その中に至仁なる孔子を位置づけている。おそらく太虚の皇上帝信仰の確立がこのような変化を生み出したのであろう。29歳（丙子之冬）の㊺「謹賛神農尊像」は、

㊺　開物成務　繼レ天立レ極　嘗レ草作レ醫　藝レ穀足レ食
　　兩事不レ設　兆民豈息　大德曰レ生　巍々唯則

とあってやはり神農様への信仰がみられる。医薬と農業の両事を兆民の生活上必須のものというのは、藤樹自身の生活体験と密着している。彼が大部の医学書を著したことはその持病とも関連しているにちがいない。ここにも彼の生活と信仰の強い結びつきを読みとることができる。儒学と医学と農業の三位一体の中に彼は最上の生き方を見出していた。儒学の神としての孔子、医・農の神としての神農という個別化した信仰は、やがて統一神へと統合されねばならなかった。

28歳（乙亥之春）の⑤「於レ洛偶成」は小川村での生活が落着いてきたことを示している。

⑤　吾孤鼓レ惑世皆竽　面友盡言可レ絶レ絃
　今亦有レ期人不レ識　烏紗巾上是青天

これは京都に行って易を講ずる師を求めた頃の詩であって、この年に『易学啓蒙』を入手して筮儀に通じたという（年譜）。小川村に帰っての新生活は藩士としての生活とは全く異なり、今までの友人たちとも離れてしまったが、しかしまた新しい心友が生れつつあった。前にあげ

た29歳の⑨の詩の前書に「会二藤田子於洛一、而又邂逅初逢二嶋川子一、皆心友也、於レ是弄レ丸譚レ易、惟日不レ足」とあって、藤田・嶋川といった心友を得ている。今また新しく鍾子期を得たのである。

「烏紗巾上是青天」とは何を指すのであろうか。司空図の七絶「修史亭」に「烏紗巾上是青天　檢束酬レ知四十年　誰料平生臂レ鷹手　挑レ燈自送佛前銭」とあって、村上哲見氏は「起句は何か深い寓意があるようだが、よくわからない。天隠注に「巾上の天を指して以て自ら誓う」とあるが、何を誓うのであろうか。烏紗巾は隠者の着するものであろうし、自分が官界を捨てて隠棲していることをいうであろう。その自分の進退を見守ってくれるのは、かの碧空のみというこころであろうか」（中国古典選『三体詩』上、一三八頁）と言われる。これにしたがえば、藤樹は藩士の身分を捨てて小川村に帰った自分を司空図と似ていると考えてこの起句を転用したことになろう。ただ藤樹の場合は小川村の生活を心から喜んでおり、過去の武士生活と対比して現在を多少とも零落したなどとは全く感じていない。失意ではなく得意であった。なお烏紗巾を官服と解するなら、検束された武士生活の上にはひろびろした青天がつづいており、武士を捨てても、同じ青天の下にあって自由に暮らすことができるのだ、という意味になるかもしれない。いずれにせよ藤樹は新生活を自由と感じていたのであって、前述したような「ヨク寝ルコト一年余」云々のことと符合している。30歳の⑩「丁丑鶏旦題二草稿一」の結句に「野草官梅同此春」とあるのも参考になる。

⑩　義畫昭昭無極眞　彖爻十翼趣レ時陳
　　發明有レ得莫レ言レ贅　野草官梅同此春

五　思想を述べる詩

小川村での生活が安定し読書に耽ることもできるようになるにしたがって藤樹の詩は直に心情を表現するよりも、思想を述べる詩となっていく。思想を述べることを通して自己の心境を表現するのである。

28歳（乙亥之秋）の⑥「寄友」がそれを示す。

⑥　乃獸乃禽　従二小體一　須下求二明德一復中其全上
　　請看此理甚分曉　鳶戾レ天兮魚躍レ淵

この詩の前書には京から来た友人に白鹿洞規を書いて示諭した、とあり、「藤樹規」（33歳）を作るより以前においては朱子の白鹿洞規に依據していた。起句は孟子の「其の大體に従へば大人と為り、其の小體に従へば小人と為る」（告子上、一五五）によっているが、第二句において完全なる明徳に復すべしといっているのは重要である。「藤樹規」に於いてはそのはじめに『大学』の「明明徳」を掲げ、三綱領の後に「畏天命、尊德性」を挙げ、何よりも人間の心内に厳存する「明德」を第一とした。朱子学的格套に対してかなり批判的でありながらもなお朱子学を十分には克服していなかった28歳の段階において、すでに藤樹は「明德」に重きを置いていた。大體を朱子は「心」と注するが藤樹ははっきりと「明德」という。『伝習録』上、九〇条に「明德は是れ此の心の德、即ち是れ仁、仁者は天地萬物を以て一体と為す」とあ

り、「大學問」に「大人は天地萬物を以て一體と為す。……大人の能く天地を以て一體と為すは、之に意あるに非ざるなり。其の心の仁、本と是のごとし」とあるのを思い起させる。明德＝心之仁＝大體は陽明学において一つに結びついた言葉であって、言いかえれば「良知」に他ならない。藤樹が「明德」を強く意識したのは、陽明学の書物を直接読んだからではなく、はるかその以前であったことになる。とすれば後に「良知」の教を知ってただちにこれを最高のものとして受用したその精神的素地は少くともこの28歳頃に形成されていたことになる。当時陽明学の良知の思想に接した人は、藤樹のみではなかったわけであるが、これを正しいものとして受用したのは、藤樹自身にそれを受け入れるにもっとも適した資質・性格があったからである。そういったことを⑥の詩は考えさせてくれる。

29歳⑦「丙子歳旦」

⑦　格致誠脩貴二日新一　易難先后不二彬彬一
　　料知聖学成功地　氣朔今朝共是春

には特に新味はないが、「明德」を中核として三綱領八条目を理解するのであれば、『大学古本』を尊ぶ陽明の思想にやがて共鳴していく素地であるかもしれない。同じく29歳（丙子之春）の⑧「送信古」の前書に「或辨二致知之疑一、或講二克己之功一、或論二一心之妙一、或明二萬物之理一」とあって、「致知」の解釈について疑問を抱いていたことがわかる。朱子の知的解釈に対する疑いではなかったかと想像するのは、下文に「一心之妙」とあるからである。

⑧　晦盲否塞聖人謨　聞識窮經皆俗儒
　　世道重任君勿レ讓　惟時吾輩中流瓠

経書を究める人々は皆俗儒というのは普通の朱子学的儒者に対する痛罵であろう。経書の文字の解釈に浮身をやつすことをやめて世のため人のために実践せよという気概を示している。船の転覆したような世の中にあって自らを中流に浮ぶ瓠壺にたとえるとき、藤樹の志はすでに朱子学を離れようとしている。

30歳（丁丑之春）の⑪「送池田子」の前書に「講二論大學之心法一、而有二輔仁之益一矣」というように「心法」の語が見える。これは心の本来の姿に立ちかえる修養法を説くのであろう。

⑪　滿襟義氣究二精微一　遠促二旅裝一行不レ違
　　離二別河邊一相勵レ道　勿レ忘應接操舟機

結句は「心」のはたらきを活潑にし時に応じ所にしたがって融通無礙に物事を処理していくことを忘れてはならぬ、との意であろう。陽明の事上磨錬を思わしめるが、また31歳の⑭「送中川子」の前書にも「講二論大學之心法一」とあって、

⑭　畏レ天尊レ性莫レ懐レ居　世事紛紛以レ己憂
　　誠意工夫純不レ已　孔顔至樂自レ茲求

という。大学の心法とは、天を畏れ性を尊び至楽の境地に至る方法である。前書に「體認自修」の語がみえていて、やはり経書の知的理解を超えようとしている。なお「畏天尊性」は藤樹規の「畏天命尊德性」の先触れである。「畏天」という宗教的心情は同じ頃の作とされ

る⑮「五福六極吟」にもみられる。

⑮ 惠レ迪 吉 兮 從レ逆 凶　　嚮 威 期二福 極一毋レ評
　　試 舟 盪レ陸 車 浮レ海　　枉二費 衆 功一虛 器 成

洪範によれば五福は「壽・富・康寧・收好德・考終命」、六極は「凶短折・疾・憂・貧・惡・弱」である。長寿、富、安らかさ、楽道、天命への随順が福であり、短命、身の不安、心の不安、貧、剛に過ぎること、柔に過ぎることが禍である(以上蔡伝による)。要するに身心両面にわたる福と禍であるが、この詩は「迪(道)に惠(順)へば吉、逆に從へば凶」(大禹謨)、「嚮(勸)むるに五福に用ひ、威(懲)するに六極を用ふ」(洪範)をふまえている。現在における善悪の行が将来の禍福を決定するという因果応報の思想を藤樹は早くから保持していた。後三十六、七歳の頃に著した『鑑草』は明末の顔茂猷『迪吉録』にもとづいて仏教的な因果応報の教を説いたといわれるが、その考え方もまたこの31歳頃にすでに存在していたのである。『鑑草』の序に「倩(つらつら)世間の福ひを思ひくらぶるに、身やすく心たのしび、子孫のさかふるを上とす。命のながきを次とす、位たかく富るを下とす。此福ひの種は明德仏性なり。此種をまきて此福ひを造る田地は、人倫日用の交なり。明德仏性をつねに明らかにして何事につきてもむさぼらず、いからず、かたくなならず、ひずかしからず、親につかへては孝行の誠をつくし、夫につかへては順從の道を守り、子をそだつるには正しき道にしたがひ、夫の兄弟一族には其程々にしたがひてこんせつにあいしらひ、家内の僕にはねんごろに情ふかく、こつじき非人に至るまで慈悲をほどこすを明德仏性の修行とす。此修行誠あれば、かならず其生れつきの福分を得る事、たとえばふかく耕しよく耘りぬれば秋実むなしからざるがごとし」といい、また、「孝逆之報」には「孝行なる人には天道福をあたへ、不幸なる人には天罰をくだし給ふを報といふなり」とある。⑥の明德の思想、⑭の畏天尊性の思想、⑮の五福六極・惠迪吉の思想、さらには⑫の孝の思想が綜合されればこの『鑑草』の因果応報の教にまで至るであろうことは必然である。藤樹の生れつきの精神的素地が以上のような形で次第に顕在化していくのである。なお31歳の夏の作(年譜)といわれる「原人」には「五福惟厥賞、六極惟厥刑」とあって、五福六極を皇上帝の賞罰とみている。

藤樹の思想形成が小川村帰省後三、四年の間にほぼできあがったと考えられることと関連していえば、彼の漢詩によると、年譜の記載よりも少し遡ってその事実があったのではないかと思われる場合がいくつかある。

31歳(戊寅之秋)の⑰「送吉田子」の前書に「爲講二論語一及レ終二鄉黨篇一而歸」とある。

⑰ 一 貫 心 法 勿二他 求一　　鄉 黨 全 篇 聖 所レ裁
　　動 靜 云 爲 宜レ止レ善　　山 梁 雌 雉 亦 時 哉

年譜32歳の秋に「『論語』ヲ講ズ。「鄉黨」ノ篇ニ至テ、大ニ感得觸發アリ。」と記載してあるよりも一年早いことになる。「山梁雌雉亦時哉」は鄉党篇の最後の句であることを見ても鄉党全篇の講了の喜びを

看取することができる。後に完成した『論語鄉黨啓蒙翼伝』はこの句について「天機自然發見、活潑潑地者也」と説いているが、31歳⑰の詩に於てすでにこの境地に到達していたと考えられる。

32歳⑱「己卯之歳旦」の前書に「小學之講末レ終レ篇、而偶逢二己卯之鷄旦一」とあるが、年譜では32歳「夏、『小學』ヲ講ズ。明年ノ冬ニ至テ終ル」とあってやはり一年ずれている。

⑱ 孝悌神明無二兩事一　乾元聖德察二人倫一
莫レ言只是學之小　一片彩霞千紫春

『小学』に教える日常的な孝悌の行いが、はるか乾元（皇上帝）の神明と一つに連続していることを詠んでいる。

同じ頃の作かと思われる⑲「送中村子」は『大学』の講義を終えた時の詩である。

⑲ 八目工夫請勉レ諸　浩然眞氣復二其初一
死生貧富我何與　一片浮雲過二太虛一

「一片浮雲過太虛」は、陽明の泛海詩の「險夷原不レ滯二胸中一、何異浮雲過二太空一」を連想させる。果して陽明の詩を既に読んでいたのであろうか。もちろん論語の「不義而富且貴、於レ我如二浮雲一」（述而、一六二）をふまえれば同じ様な発想は生れるであろうから、陽明の詩とは関係がないかもしれない。『全集』では「浮雲」が「浮氣」となっている。太空が太虛となっているから偶然の一致ともいえる。しかしその詩句はきわめてよく似ている。いずれにせよ、陽明全集を得て熟読し大いに触発されたといわれるのは37歳（年譜）であるが、藤樹の心にはすでに早くその受け入れ体制が十分熟していたのである。

「太虛」の思想については、年譜によれば33歳の冬に『王龍溪語録』を読みその大虛・一貫の道を理解したようであるが、⑲の詩を32歳の作とすればこの「太虛」思想も年譜記載よりも一年早いことになる。

32歳（己卯之春）の⑳「題竹生嶋」は

⑳ 艮上一陽從レ坎出　卦神本是大明神
浮屠誤做辨才號　天運循還必復レ眞

とあって⑲の「浩然眞氣復其初」と通じているから、⑲はほぼ同じ頃の作とみてよいであろう。

㉑「送森村子」は年月の記載がないが、その前書に「爲講二原人持敬圖說一」とある。『原人』『持敬圖說』を作ったのは31歳夏（年譜）であるから、この詩はそれ以後の作である。

㉑ 世間富貴片雲輕　天爵常尊知足榮
西走東奔還可レ喜　帝心庸玉二女於成一

この詩も富貴は浮雲の如しという主題であって⑲と通ずる。したがって㉑も32歳前後の作とみてよいであろう。

藤樹は33歳に『翁問答』を著して（年譜）明德、孝、皇上帝、太虛の思想を体系的に明確にしたのであるが、彼の漢詩を通じてみる限り、かなり早期からすでにその根幹となるものをすべて悟っていたことが分かる。したがって33歳に『性理會通』を読み『王龍溪語録』を読んで触発されたのは、それらの思想の再確認であった。明末の諸書にみられる思想と藤樹の思想との関係についてはすでに拙稿「中國思想

と藤樹」に述べておいたが、思想における影響という問題を改めて考えさせられる。藤樹が明末の諸書によって啓発され、それらの中の思想（用語）を消化して自己独自の体系にまとめたことは事実であるが、啓発され影響を受けるためには、まず自分自身の中に啓発・影響されるべき素地がなくてはならない。朱子学的格套に対する批判的心情や、神に対する宗教的心情がすでに藤樹の生れつきの心の中に存していたが故に、彼は明末の諸書に感動したのである。他の人であればたとい同じく明末の書を読んでも少しも啓発されなかったであろう。

六　33歳以後の詩

33歳以後の詩は思想詩としての性格がよりいっそう顕著になっていく。富貴は浮雲の如しという主題を詩にしたときには、なおその中に生活に悩む心情を読み取ることができるけれども、33歳の㉒「庚辰之歳旦」以後の詩となると、生活もすっかり安定し心も静まってきて、自信をもって自己の学問の到達点を述べている。

33歳「庚辰之歳旦」は、

㉒　致知格物學雖レ新　　十有八年意未レ眞
　　天佑復レ陽令レ至レ泰　　今朝心地似レ回レ春

という。「十有八年」というのは17歳頃に『大学』を読みはじめてから十八年になるということであるが、その『大学』の致知格物の真の意味が次第に分かってきたというのである。前書に「庚辰之鶏旦、將レ試レ觚、而心似レ有レ所レ得」とあってその心境の安定をよく示している。「羈旅既十八年」（②の前書）「羈旅十有九年之非」（④の前書）と記した26歳の歳旦、28歳の歳旦の心境と比較するならば、まさに「泰」そのものであった。泰卦の彖伝に「泰、小往大來、吉亨、則是天地交、而萬物通也、上下交、而其志同也」とあるように、藤樹は天佑によって万物通じ志を同じくする弟子たちを得て、心安らかである。33歳庚辰之春の㉓「題菅廟」もまた明るい希望に満ちている。

㉓　七字靈光光二日東一　　照臨赫赫在二儒宗一
　　斯文興起冀二神助一　　千里飛梅一夜松

天佑あり、「天満大自在天神」の神助あり、彼の自信は深まっていく。34歳㉔「辛巳之歳旦」の前書に「有下朋自二遠方一來上、而爲講二四書一、大學既終レ篇、而論講及二學而篇一、而逢二辛巳之春一」とあって33歳より34歳にかけて講学に専念した姿をみることができる。

㉔　大學規模宇宙寛　　說而不レ愠深林蘭
　　靈臺春到能弘レ道　　智水氷開或起レ瀾
　　梅梢擁レ雪勵二三省一　　楊柳和レ風悟二一貫一
　　自レ此雲霞千變裡　　鑑衡慮得泰山安

次の㉕は右の律詩につづくものである。

㉕　異端索隱反二中庸一　　隨柳傍花見不レ同
　　造化分明一貫道　　太虛廖廓總春風

「太虛廖廓」の語があるが、晩年の作といわれる『大学（蒙註）』に

學問ノ道在レ明二明德一。明德ハ方寸ニ具ハルトイヘドモ、太虛廖廓其本体ナレバ、天地萬物ヲ包括ス。其大外ナク其尊對ナシ。如レ

此廣大ナル德ヲ明ニスル學問ナル故ニ大學ト號ス。

とあって、明德を太虚廖廓と一つにしている。つまり『大学（蒙註）』は⑥の明德の思想とこの㉕の「太虚廖廓」の思想とを一つに結合していることになる。36歳の㊹（前出）にも「太虚廖廓」の語がある。㉔の「大學規模宇宙寛」から考えると少くとも34歳のときに明德と太虚廖廓とを一つにしていたのである。

34歳辛巳之歳、夏之仲の㉖「參拜二太神宮一準二祝詞一」は

㉖ 光華孝德續二無窮一　正與二犧皇一業亦同
　黙禱聖人神道教　照臨六合二太神宮

とある。中国の開祖犧皇と日本の開祖天照大神とを並称し、それぞれに対する孝を聖人神道の教としてとらえるのが藤樹の孝思想であるが、さらにこの両者の上に太虚の皇上帝が存在するから、孝は最終的には皇上帝に仕えることを意味する。中国の経書から得た孝思想を日本に適用したとき、日本の開祖を通してこそ皇上帝に至ることができるとはっきり自覚したことをこの詩は示している。年譜34歳の項に「夏、二三子トトモニ勢州大神宮ニ參詣ス」とあるのとよく照応しているし、この年の秋に『孝経啓蒙』を著わそうとし翌年に完成したことも彼の思想の成熟をあらわしている。「格套」からの明確な脱却もこの年であった。大神宮信仰、太虚廖廓の皇上帝信仰の確立が朱子学との訣別を決定的にしたのである。35歳㉗「壬午之歳旦」の前書に「愚窃有レ志二于心學一」とあって、朱子の「理學」ではなくて陽明学的な「心學」への志をはっきりと表明している。

㉗ 徒從レ外　勿レ認二文章一　梅白桃紅春色常
　非レ綠非レ青禮葉盛　不レ濃不レ淡樂二花香一

起句は、「務外」「外求」を否定して内なるものに従がい、「詞章」の学を否定して「無用之虚文」（伝習録中巻、答顧東橋書）に従事すべからず、と説く陽明「心學」の中心思想とよく一致している。結句はありのままの花香を楽しもうとする心境を語る。31歳（戊寅之春）の⑬「偶成」に「世味本惟淡　甘辛由レ疾成　正レ心無二氣累一　玉食是藜羹」とあって、粗食の藜羹を「淡」として敢てそれを玉食に見たてようとする心的努力がみられるが、㉗に於いては、白きも紅きも濃きも淡きも、玉食は玉食として粗食は粗食としてそのままに楽しもうとする一段高い境地に達している。同じ頃と思われる㉘「送谷川子」は、生活のため同志の群を離れて遠く豫州に仕えようとし、文を学ぶ余力のないことを憂える谷川子に与えた詩（前書）である。

㉘ 素レ位　勿レ患　離二同學一　他山石可二以攻レ玉
　入神心脈豈在レ文　莫レ破至誠無息曲

簿書訟獄の事務が繁雑で学を為す暇がないとした一属官に、陽明が心に偏倚なく公正にその事務を処理することが格物致知の学であり「實學」なのだと教えたこと（『伝習録』下、一八条）に似ている。入神心脈（真実の心学）は文を学ぶことに在るのではないからである。

34歳の秋に熊沢蕃山が来訪し、翌年夏、その帰省にあたって与えた詩が35歳（壬午之夏）の㉙「送熊沢子」である。その前書には、蕃山を「性命を以て相友愛する者」といい、「同聲相應じ同氣相求むるの機

あり」という。「人乎天也、故講習討論、心心相通融、而甚喜レ得二輔仁之益・莫逆之寄趣一」というように、蕃山は藤樹にとり最も意気投合した心友であった。

㉙ 動而無レ動 靜無レ靜　無倚圓神未發中
　慎獨玄機必於是　上天之載自融通

『中庸』にいう未発之中を真に体得するとき、すべての事に融通無礙に対応し得るとする。㉗の心境を中庸の語に託すればこの㉙となるのである。「玄機」は神秘的な語気であるが、⑲で『大学』の八条目による現実的な工夫努力を説くことから次第に進んで、中庸の未発之中、無静無動の真奥の道理を直観的に悟ろうとする態度へと移行している。

35歳の㉚「送中川子」の前書には「中川子志學翌年、以二父兄之命一、遠来二草廬一、入二心學之門一」とあって、豫州からの入門者も数を増してきたことを示している。自ら脱去した藩から再び門人を得た喜びは、その「心學」の自信をますます深めたことであろう。別れに臨んで全孝心法を賦し、無声に聴き無形に視るの愛敬を望んでいる。孝は父母に愛敬の誠を尽すことであるが、その愛敬の本体は藤樹にとっては耳に聞えず目に見えない無声・無形の未発之中であった。

㉚ 孝德以レ中爲二厥體一　無レ偏無倚至誠神
　一毫意必三千罪　努力戒懼不顯眞

「眞」なるものは不顕であり奥深いものであるという神秘主義的な傾向がきわめてはっきりとしてきている。

㉙の玄機ともつながっている。④の「昔日雖知非眞知」、㉒の「十有八年意未眞」、⑳の「天運循還必復眞」というように「眞」なるものを求めて模索していた藤樹はこの35歳頃になってその「眞」を悟ったもののようである。

35歳の㉛「送横山子」は、孝経の心法（前書）を詠んでいる。

㉛ 愛敬順時百事公　驕爭除后萬殊通
　立レ身行レ道配レ天敬　正與二神明一同二此中一

孝経にもとづいて「愛敬」「立身行道」「配天」などの用語を用いているが、その愛敬の孝德は㉚と同様に「中」と一体であった。35歳の年譜に

　先生、近時專ラ『孝経』ヲ講明シテ、常ニ「愛敬」ノ二字ヲ掲ゲ出シテ、心体ヲ体認セシム。曰「心ノ本体、原是愛敬的。……此心ヲ認テ、存養シテ失ザルトキハ、則聖人ノ心也。」

とあるのとよく一致している。『翁問答』二条にも

　然るゆへに世俗、孝は親につかふる一事となして、浅近の道理なりとおもへり。孔子なげかしくおぼしめして、万世の心盲をひらかんために、孝德、神妙不測、広大深遠にして、はじめなくおはりなき神道を、孝経に発明したまふ。孝德の感通をてちかくなづけいへば、愛敬の二字につゞまれり。

とあるが、藤樹の「心學」は、孝德＝愛敬＝中＝聖人の心＝敬天、という体系であった。

詩の中で「良知」がはきり意識されてくるのは、36歳の㉜「癸未之

歳旦」である。その前書に「一貫之靈竅、字レ之曰二良知一、千古聖聖相傳之道、學者自二鄉人一所二以可レ至二於聖人一之學脈、唯在二于茲一而已矣」とあって、「致知二字、眞是箇千古聖傳之秘」（伝習録下、一一条）「夫良知者、性之靈竅、千古聖學之宗」（王竜溪「大学首章解義」）を想起させる。「靈竅」の語は33歳に入手した「王龍溪語録」の影響であろう。伝習録では「靈明」の語が多く用いられているからである。

㉜ 無情無欲上天仁　不學知能學脈眞
吾儕弗レ須レ安二自棄一　綿蠻黄鳥亦知レ春

「無欲」の語も王竜溪が「心之本體、原是至善而無欲」「無欲之體」（大学首章解義）などと常用しているからその影響であろう。㉛で「愛敬」が「中」と一つであったが、この「中」はいいかえれば㉜の良知である。愛敬と良知が一つになる思想はやはり王竜溪にある。「聞講書院會語」（『龍溪王先生全集』巻一）に「先生曰、先師提二出良知兩字一、本二諸一念之微一、徵二諸愛敬一、而達二諸天下一、乃千古經論之靈樞」とあって、良知を一念の微としての「中」に本づけ、それが発現して愛敬となり天下にまでひろがる、という思想を述べている。したがって㉜に初めて「良知」を掲げるが、それは多く王竜溪の思想に負っていると思われる。

36歳（癸未之秋）の㉝「酬二友人嶋川子一」には「無迎無將」（『荘子』応帝王）「坐忘」（同、大宗師）といった言葉がみえる。

㉝ 靈明一點地雷陽　無迎無將眞坐忘
此箇玄機君信否　通神孝德出入方

地雷は復卦（䷗）で一陽来復の意であるが、卦辞に「復亨、出入無レ疾」とあるので結句は「出入方」であろう。『遺稿』『全集』ともに「出人方」となっているのは誤りである。孝德を以て行動する（出入）とき障害（疾）は何もないとの意である。「無迎無將」は荘子によれば、「其の天に受くる所を盡して得を見るなく、亦虛なるのみ。至人の心を用ふるは鏡の若く、將らず迎へず、應じて藏せず」とあるから、藤樹は、天命に安んじ太虛の道に復って活潑に生きていこうという気持を表現したのである。「坐忘」は仁義を忘れ礼楽を忘れ枝体をすて（無欲）聡明をしりぞけ、形を離れ知を去って大通に同ずることである。藤樹の言葉でいえば「格套」を去って朱子学的な知をしりぞけ、「眞性活潑の体」（年譜34歳）を発揮することである。「玄機」の語は㉙にもあったが、『老子』の「玄」、「玄德深矣遠矣、與レ物反矣、然後乃至二大順一」（六五章）、『荘子』の「……天地と合を爲し……愚なるがごとく昏なるがごとし。是を玄德と謂ふ。大順に同ず」（天地）とつながる。⑯「論學」の結句に「玄德」の語がみえるからである。

⑯ 事レ親盡レ孝父惟慈　地利天明民秉彝
好惡麟經一王法　行藏儀易六爻時
夏葛冬裘我不レ與　春蘭秋菊聖無爲
舜何人也立二其志一　誠意正心玄德基

右の詩は⑮「五福六極吟」の次に並んでいていずれも正確な年次の記載はない。ただ⑭の「畏天」「誠意」「至楽」などの思想とつながるこ

とからみて⑮⑯も31歳頃の作とみてほぼ誤りないであろう。これは大学と孝経と春秋・易・書などの五経とを結びつけていて全く儒教的であるが、㉝は易と老子と荘子とを一つにつなげた詩である。⑮で前述したように仏教的因果応報の思想に発展するきざしも早くからあった。したがって儒・仏・老荘の三教を一つにする藤樹の立場は漢詩を通じても明瞭に知ることができるわけである。

七　晩年の詩

以上のようにして藤樹の晩年にはきわめて明るい調子の詩が多くなる。37歳の㉞「甲申之歳旦」

㉞ 穆穆文王不顯春　梅花鶯語二南民
何爲後學不興起　豪傑惟人予亦人

36歳の秋以来、文王の化を讃える周南・召南の詩を講じては人を感服させ（年譜）豪傑の士の興起を期待する。

38歳の㉟「乙酉之歳旦」の前書には「古來難レ聞者道、天下難レ得者同志。而同志數輩相遇、講二心學於江西之僻壤一、誠可レ謂二大幸一也」とあって多くの同志を得て「心學」を講ずる喜びをいう。

㉟ 習若二密雲一名利埃　何時白日青天開
吾人學問似二今旦一　朔已雖レ來春未レ回

自信をもって弟子たちの努力を励ましている。前年に『陽明全集』を入手して「甚ダ觸發印證スルコト多キコトヲ悦ブ。其ノ學彌進ム」（年譜37歳）というから、陽明その人の著作を読むことによって、彼の従来の思想がほぼ陽明と一致することをたしかめることができ、いっそう自信を深めて「心學」を講じたのである。

39歳の㊱「丙戌之歳旦」の前書には「二三同志頼二天之靈一、幸講二習一貫之學術一、而未レ能レ得レ仁、唯辨二天下第一等事在二於茲一、而僅超二脱世情之拘攣一……」とある。「頼天之靈」は陽明の好む語であって（山下『陽明学の研究』上、二三頁）、藤樹はそれを使用したのかもしれない（藤樹の真蹟では多少文字に出入があることを『全集』の頭注に記してあるが「頼天之靈」の語は同一である）。

㊱ 霞簇二四山一和氣新　梅花柳色僉成レ眞
今朝堂上三行酒　同志唯喜春外春

弟子たちと元旦を賀する喜びをそのままに表現している。

39歳（丙戌之夏）の㊲「偶成」は名利に拘泥する世間の人々を憐んでいるが、そこに自己の生き方に対する満足感を読み取ることができる。

㊲ 獄外有レ獄納二世界一　名利傲意其四壁
哀哉世間多少人　拘二攣這裡一長戚戚

この世の地獄性を述べているが、その地獄が心の転換によって極楽に転ずることをいうのである。㊱の前書にも「庶幾將來之眞樂」とあり、⑭「孔顔至樂」を求めてきた藤樹はここにそれを得たのであろう。なお王陽明の「啾啾吟」に「知者不レ惑仁不レ憂　君何戚戚雙眉愁」とあるのと通じている。

40歳の㊳「丁亥正月之吉試翰之次偶成」になると、人の世と天上界

とが実は同一であるという心境を述べている。

㊳ 天上無レ心生二泰陽一　人間有レ意嘉二新正一
　人間天上本無レ異　日用良知是至誠

天上と人間を包みこむ「太虚」において道は一貫して同じであるとの思想、そして日々の平凡な生活の中に於て良知に依存して誠を尽していくところに人間の正しい生き方があるのだと深く信じ真に楽しむ態度である。この詩に続く㊴「又戯作」も平凡な正月の喜びをいう。

㊴ 靈府無レ塵物我融　温光和氣四時同
　春來心上更無レ別　堂有二蓬萊一門有レ松

天上と人間が同一であるように四季もまた常に温光和気に満ちていて変るところはないと感ずる藤樹には、静かな幸福感とともに何か忍び寄る極楽浄土の影すなわち「死」の予感があった。同じく40歳（丁亥之夏）の㊵「送加世子歸郷」には「致知」と「安樂」の語をみる。

㊵ 萬苦百殃克己鑠　五常十義致知全
　請君歸去事二斯語一　安樂世間莫レ大レ焉

「致良知」の一語に大なる「安樂」はあるという徹底した立場は、六字の念仏に大往生を託する仏徒の信仰に似たものを感ずる。40歳（丁亥之秋）の㊶「悼聲友玉井子早世」もまた生死一如をいう。

㊶ 講論日日相師レ道　不滅眼光由レ此明
　不幸今亡雖レ可レ戚　孰二與浪死與二虚生一

盲者もまた道を師とすることによってその眼光を回復するが、浪死虚生の人は実は眼なき人である。これはまさしく宗教的な信仰に属する。

41歳の二首㊷㊸はともに「唐虞」すなわち堯舜の太平の聖代に住する如き心境を述べている。この世をそのまま極楽の世界であると信ずるのは、心の転換によって現実世界を理想境に転換する宗教者の心境である。㊷「戊子之歳旦」には

㊷ 教官讀レ法屬二民晨一　同志彌希勸戒眞
　怪且羞吾心不レ古　千山萬木唐虞春

とあり、戊子六月望の㊸「夏夜見レ月」は

㊸ 清風滿レ坐忘二炎蒸一　明月當レ天絶二世塵一
　同志偶然乘レ興處　不レ知不レ識唐虞民

という。

この時から二ケ月余「秋八月二十有五日、朝卯時、先生、藤樹ノ下ニ卒。」と年譜に記してある。（一九七九・一〇・三一）

本稿は拙稿「中国思想と藤樹」（日本思想大系29『中江藤樹』一九七四　岩波書店）及び Nakae Tōju's Religious Thought and Its Relation to "Jitsugaku" (*Principle and Practicality*: Edited by Wm. Theodore de Bary and Irene Bloom 1979 Columbia University Press) の続編である。